

米の季節です！



刈り取り作業を行う工藤さん

今年も作柄良好

～「青天の霹靂」収穫～

当ＪＡ管内で、９月上旬から県ブランド米「青天の霹靂」の刈り取りをしました。当ＪＡ管内では、287経営体が809㍍作付けし、約6万8000俵（1俵60㍏）を出荷する予定です。県全体の作付面積のうち約5割が当ＪＡ管内です。

「青天の霹靂」は、出荷基準を玄米タンパク質含有率水分15㍍換算で、6.4㍍以下と設けており、生産者は田植え前から土壌診断に基づいたケイ酸質資材や追肥時期の徹底、細やかな水管理をし、栽培管理を行ってきました。

ＪＡ特Ａ米プレミアム研究会の会長を務める工藤憲男さんは９月９日、刈り取り作業を行いました。

工藤さんは水田約23.5㍍のうち10.5㍍で同品種を栽培。高タンパクにならないよう基本に忠実に管理してきました。「昨年以上の作柄が見込まれるので、刈り遅れのないように作業を進めていきたい。今年もおいしい米ができたので、消費者の皆さんには楽しみにしてしてほしい」と話しました。

また「青天の霹靂」は、10月10日より全国一斉販売されています。

数量確保で安定販売

～「まっしぐら」カントリーエレベーターに初入庫～

当ＪＡは、米の需要動向への対応と米生産者の所得向上につなげるため、令和2年産米から3カ所ある共同乾燥調製施設での荷受品種を「つがるロマン」から「まっしぐら」に変更しました。9月19日、外食産業などで需要がある「まっしぐら」が平川カントリーエレベーターに初めて入庫しました。20年産「まっしぐら」は12万6000俵（1俵／60㍏）の入庫を計画しています。

「まっしぐら」は「つがるロマン」と比べて約1割の収量増加が見込めるため、所得向上が期待できます。

米穀畜産課の担当者は「品種変更をするために、一年以上前から『まっしぐら』の需要動向の高まりや収穫量の増加による所得向上を各地の米生産者へ説明してきた。数量を確保し、安定販売につなげたい」と話しました。



初入庫した「まっしぐら」